

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	北澤毅	印
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 2 名
研究課題	表象としての絵本におけるリズム・造形表現の意味形成に関する理論と実践の研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科教育学専攻博士課程後期課程4年	矢島毅昌	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科教育学専攻博士課程後期課程4年	矢島毅昌	
	文学研究科教育学専攻博士課程前期課程2年	戸塚史華	
研究期間	2004年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

絵本は低年齢の子どもがはじめて出会う本として支持されるとともに、教育的な機能を期待されたメディアであり、教育学にとって重要な研究対象である。だが絵本は、そのような「子ども向け」なイメージを強く帯びているために教育的な意義に偏って論じられてきた。だが絵本は、一般的な書籍に比べて絵の占める比重が高くレイアウトも複雑となり、また「めくる」行為に配慮した本の強度や紙の質やページの仕掛けといった物としての側面、さらにそこから生じる表現のリズムという側面から見ても際立った特徴を持っている。また多くの人々が商品として手に取る絵本は、社会の中で様々な機能や役割や意義を付与されるものでもある。本研究は、社会と芸術と教育への関心に基づき、絵本表現における「絵」「文字」「素材」の意味や、その社会性を問い直すものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[児童文化] [芸術教育] [造形デザイン]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本共同研究は、教育学研究において社会学や芸術学的な研究関心をもつ二名が、「子ども」「教育」「視覚」「造形」「美術」などを学際的に横断する「絵本」について、実験的な分析を試みたものである。そのために重視した着眼点は、次のようなものである。

これまで絵本が「教育」や「子ども」との関連に偏って語られていた弊害を打破するために、表現方法に着目しなければならない。それは絵本を美術のようにとらえ、絵本という作品そのものを重視する研究であると言えるかもしれない。だが、当然ながら絵本は真空状態の中で“絵本という作品そのもの”として存在しているわけではなく、本共同研究も安易に「教育」や「子ども」との関連を斬り捨てるわけではない。絵本の良し悪しが「教育」や「子ども」と関連した言説のなかで決められてしまう風潮を打破するために、それら言説のありかた自体にも目を向ける。

絵本も美術も、常に社会のシステムや関係する人々の中で存在してきたものであり、むしろ「教育」や「子ども」はもちろんのこと、それだけにとどまらない状況や文脈との関連性をもつ。だが、美術研究は様式研究がもつ意義と限界ゆえに言説にも目を向けるようになったのであり、本共同研究も言説の研究だけに特化してしまうことはない。

言説こそが社会の現実において決定的な重要性をもつとする立場から絵本を分析するあまり、結局のところ絵本の内容自体は分析対象として不問にされてしまった先行研究もあり、それは絵本の研究としては甚だ公平さを欠くものである。言説のもつ影響力に気を取られて“絵本を取り巻く言説の研究”が無自覚のうちに“絵本の研究”とイコールになってしまう研究とは、本共同研究は立場を異にすることはいうまでもない。美術研究において中心的な役割を担う様式論的な発想に社会の研究を加えることで視野を広げ、社会についての研究と連携することが志向されている。

以上の着眼点にもとづく研究成果は、以下の二点の研究である。

(1)「絵本とは何か」をめぐる従来の研究や議論の見取り図をつくり、『『絵本とは何か』とは何か』と問いかけ、絵本の今日的意義を考えること。

(2)絵本の社会性を「女性表現」に着目して分析した従来の社会学的研究を、造形デザイン論の視点で再検討すること。

(1)においては、これまで挙げられてきた絵本解釈のものさしを示すと共に、そこから見えてくる絵本研究の立場性・視点を見直すことで、絵本の今日的な意義を問う新たな絵本研究の方法を考察した。

「絵本とは何か」という問いは、昨今の絵本研究の基礎であり、常套句である。だが、それは「定義」ではなく「解釈」である。その「解釈」から絵本研究の立場性を考えると、「絵と言葉との関係」から考える立場、「絵本は誰のものか?／絵本はこどものものか?」という観点から考える立場、絵本とは「絵」の本であり絵の「本」であるという形態・工芸的側面から考える立場、絵本は基本的に複製・消費される＝出版美術であることを重要視する立場が考えられる。

こうして改めて「絵本とは何か」と問うてみると、余計に絵本の分かりにくさ(統一感のなさ)があぶり出される。これまでの絵本研究が誰によってなされてきたかを考えるならば、作家も編集者も重要な研究者であったし、大人が研究者だったとも言える。あるいは児童文学、美術史、造形美術、マンガ史、視覚表現、デザイン、教育学、心理学、図書館員など様々な分野の人だったという言い方もでき、立場や背景は多様だった。加えて絵本という実体に影響を与えるのは研究者ばかりではなく、消費社会のなかに取り込まれた複製品である絵本は、それに関わるあらゆる人によって見られ、語られている。「絵本とは何か」という問い立てから距離を置いて見たとき、絵本を作っているのは単純に作家だけではないということが分かる。作家や編集者のみならず、読者をも含む絵本に関わる様々な人が絵本に作用している。だからこそ絵本とは分かりにくいのではないか。絵本を取り巻くものを見ずして、絵本を語るということ＝純粋に絵本を見ることはとても難しい。それは、各々の絵本観が絵本という実体に影響を与えているということであり、そのことを「絵本がつくられるしくみ」として捉える視点が必要となる。

また、絵本は基本的に複製・消費される＝出版美術であるという視点の移動と類似した現象が、20世紀の美術においても起こっている。そのことを踏まえ、「<物(ぶつ)>であり<仕組み>である絵本」という視点を提示する。そして、絵本の仕組みと20世紀美術における「反抗」とを照らし合わせることで、絵本の“今日的意義”というものが浮かび上がってくる可能性を仮説として提示した。

印刷技術の発展と並行して展開してきた絵本は、基本的に最初から①「商品＝複製品して流通する」。それは絵本作家・大人・子供・親・研究者・編集者・出版社・書店・図書館など様々なフィルターを通して日々変形しながら絵本なるものはつくられているということでもある。そればかりでなく、物(ぶつ)でなくてはならない絵本は、そもそもそれ自体が②「絵や言葉・ページからなる1つの仕組み(モンタージュ)である」＝もともとオリジナリティとは相性が悪い。それ自体拡散している。加えてイメージが拡散する複製・消費文化に依拠しながら、③「物でなくて

研究成果の概要 つづき

はならない＝手でめくる本（プロセス）が作品である」という背反するような性格を持つ。

美術史に迎合することや対抗すること、あるいは美術史の外であるとか中であるとかいうことに話を持っていくのではなく、それを理論的典拠としながら、あくまでも物（ぶつ）としての絵本とそれを取り囲むものたちをも巻き込んだ今日的な絵本の意義を考えていくことが、絵本の独自性に近づくことにもなるであろうし、歴史という枠組みを捉え直すことにもつながるであろうと考えられる。

(2)においては、本研究の理論的立場を具体的な事例分析に適用することを目指し、ジェンダーの観点から絵本の女性表現を分析した社会学的な研究を、女性表現の視覚的要素・造形的要素に着目することを通じて再検討した。視覚表現のなかのジェンダーを分析するうえで、女性の描かれ方は重要な要素である。なかでも絵本は、意外に批評的なタブーの多い世界であり、批判的に内容を分析することの重要性は高い。

社会学的な研究が、ジェンダーの観点から絵本をはじめとする子ども向けメディアを分析する場合には二つの方法が考えられる。一つはメディア内容のジェンダーバイアスを浮き彫りにするもので、登場する男女の量的不均衡、年齢や職業等の属性の異なる偏り方、キャラクターやストーリー上の位置づけにおける固定的な性役割や「らしさ」の浸透等を明らかにするものである。もう一つは、男性向け・女性向けにはっきりと分かれている性別のジャンルの内容と受け手の反応を分析するものである。

だが、これらの方法では、各々のメディアがもつ固有の表現技法については考察の対象外となっている。そのため、絵本研究の場合では、必ずしもその視覚的要素や造形的要素を重視しなくても良いことになる。結果として、読み取りが容易な言葉の部分だけを解釈したり、絵の数や大きさを男女別に機械的に集計したりすることにとどまる研究が多い傾向にある。それは、文字化や数値化が容易に可能な要素ばかりを分析する姿勢であるとも考えられるだろう。

また、仮に視覚的要素・造形的要素が注目されたとしても、絵の色や形に対する素朴な印象から良し悪しが論じられるか、あるいは絵の内容から連想される意味連関や寓意・象徴のような文字化された要素で説明されることはあっても、美術やデザインの理論に基づくことは極めて稀である。さらに言えば、文字化しやすい要素に偏って分析されたとしても、文字組みや書体には無関心である。

ここで着目したのは、絵本の女性表現において、どれだけ女性が「主体」として描かれているかということである。事例として、いわさきちひろ作『あめのひのおるすばん』をめぐる社会学的な評価と美術的な評価とを再検討している。

視覚的・造形的に「主体」を描くためには、「背景」と「主体」との関係のありかたが重要となる。もちろんそれは、誰が画面の一番目に付くところに描かれているかという単純な話ではない。本研究では、文章の形式が誰の発した言葉となっているか、画面が誰の「視点」から描かれているか、「背景」と「主体」との配置がどのようになっているかに着目している。

これらの分析により、絵本の表現における「背景」と「主体」との関係から女性表現を批判するにあたり、美術の世界で論じられてきた「背景」と「主体」との関係のありかたと比べて、「遠近法」にもとづく単純な関係が前提とされていることが明らかになった。そのため、「遠近法」的に正しいとは言い難い絵によって女性が描かれた場合に、女性の「主体」がさだかではないと批判されることになり、ひいては女性を個性もなく差別的に描いた絵本だと見なされることになってしまう。

だが、絵本とは、基本的には二次元の媒体である紙を用いたものである。すでに美術の世界では、印象主義、多視点からの描写による空間の不統合、キュビズムの対象描写などによって、対象と背景の連関により三次元的イリュージョンを生み出すことは放棄されている。にもかかわらず、社会学的な絵本研究においては、三次元的イリュージョンに囚われたまま「主体」としての「女性」を素朴に想定したうえで「背景」と「主体」との関係が考えられていたといえる。

三次元空間を二次元空間に表現するうえで「正しい」方法が決まっているわけではないにもかかわらず、「主体」の不明瞭さや歪みが素朴に断じられ、それが作品の評価や価値にも影響することがある。特に社会学的関心によるメディアのジェンダー分析は教育との結びつきが強く、また絵本が教育的な意義や価値を求められやすいことを考えると、教育やジェンダーの名の下になされた批判により社会的に抹殺されてしまう絵本も出てくる可能性が高い。社会学的関心によって絵本の視覚的要素・造形的要素が無視されたまま分析され、そこで評価された教育的な意義や価値だけに絵本が支配されてしまうことの危険性を、研究者や本の選び手は自覚しなければならない。また、絵本の分析や評価をする側だけでなく、絵本を観賞する側も、視覚的要素・造形的要素の表層的な部分に囚われることなく、「主体」とは何であるかを読み解く必要がある。